

「主への感謝に満たされて」

詩編 105 編 1～4 節

聖学院大学 人間福祉学部長 大学院人間福祉学研究科長 牛津 信忠

私は、今年度定年退職の時を迎えます。こうしてチャペルでお話を申し上げるのも、これが最後になることとなります。

私は理屈っぽい人間なものですから、これまで本当に理屈っぽいお話ばかりをしてまいりました。その折りに、専門の福祉を中心にしながらも、いろいろな角度からキリスト教を見つめさせて頂くことができました。

私は祖父の代からのプロテスタントのクリスチャンで、家族全体がキリスト教徒で、父親も母親も私のふるさとである長崎の教会の納骨堂に眠っております。父親も母親も祖父も通った銀屋町教会というのが母教会です。昔はプロテスタントのメソジスト派といいましたが、今は日本基督教団の教会です。その教会に通い、小さいころからずっとプロテスタントのクリスチャンで今に至っています。今日は思い出の中から少しお話をさせて頂きたいと思います。

難しいことはさておき、経験から少しお話しすることをお許してください。特にこの時期の出席者は1年生の方が多いとお伺いしておりますので、自分自身の経験の中からお話ししたほうがよく分かっていただけのではないかと思います。若い方々に何か伝えられたらと思います。

昨年12月のクリスマスのお祝いを家族で終えて、次の日26日、私は手術のためある大学病院に入院しました。24日からクリスマスの賛美歌を歌い過ごしておりましたが、26日から病院に入院して次の日に手術と思うと、気持ちが鬱積(うっせき)して、本当に重苦しい思いでございました。

そして27日に手術です。手術というと、みじめなものでございますね。手術用の貫頭衣みたいなものを着せられ、大学病院ですから5人ほどお医者さん等がおられました。

その時の手術は簡単なものではなく、開腹手術といっておなかを20センチくらい開くものでした。

開腹手術でちょうど腹筋のところを20センチ切りました。そうして胃の5分1ぐらいでしたかを切除いたしました。悪性ではありませんでしたが、「ジスト」というタンパクの塊ができていまして、それが消化に大変支障があり、「切ったほうがいい」ということになったわけです。

タンパクの塊であるジストができるというのは、自分自身の気持ちの制御ができていなかったのでしょうか。自分自身では日常的にセルフコントロールできるというかなり強烈な気持ちがあつて、そういう気持ちのあり様が非常にかたくなに体に作用し、その一部分に、しこりをつくっていったのかもしれない。あるいはコントロールできなかったストレスのためなのかも知れません。

そういうふうに思いながら、あつという間に麻酔で眠ってしまいました。20センチ切り裂いて、胃を何分の1か切り取って、目が覚めたときにはきちんと糸で縫い合わせてありました。

最近では抜糸といって、糸を抜くことはほとんどしないのですね。抜糸はありませんで、縫ったまま糸が体の中に消えていきます。体と同化していくような糸をお使いになったようです。そういうことで、

手術が2時間か、3時間かかったのでしょうかけれども、終わりました。

終わったのはいいのですが、動けないのですね。まさに腹筋のところをザクッと切っていますので、起きることもできなければ、体を横にすることもできません。少し横にただけで激痛が走ります。それが今年のクリスマス以降のしばらくの日々でした。

初めのころは、自分自身で本当に情けなくて、情けなくて、「何でだろう」。痛みに耐えかねているというよりも、自分の心の中で破裂しそうな思いが、どうしようもなく訪れてきておりました。

実をいうと、入院は6日間しかしなくて済みました。入院しているうちに、お医者の方も、看護師の方々も、そのほかに医療ソーシャルワーカーの方もいらっしゃったと思いますが、さまざまなスタッフの方の対応のなかで、気持ちが少しずつ変わってまいりました。

病院内の対応を医療的対応と呼び、また科学的対応といって、(私は社会福祉の教員ですから)、医療的対応も個々を大切に福祉の対応を基礎に持たねばならない、そのように変わらなければならぬというふうなことをずいぶんと社会に申し上げたり致しておりました。現実には病院に入院し、お世話になってみますと、そこでは人間に対する対応そのものが非常に福祉的対応に近くなってきています。人と人との関わりの中で、患者(福祉の用語でもクライアント)のひとりびとりに対応するにあたって、クライアントの人格があらゆるところで尊重されるようにという配慮を感じさせるような、あるいは感じさせるというようなことではなく、自然に感じるができるような、そういう言葉かけあるいは態度が非常に徹底するようになっておりました。

私どもが福祉的な人への支援というときに行うあるいは行おうとしている、人を理解して自立へといざなおうとするような視点、こういう在り方と共通のものが医療のスタッフのなかに共有されておりました。人を理解しようとして受け入れながら接していこうとする努力というものを、そういう努力を感じるだけで、非常に安定が生まれてまいります。強いて言えば、その安定の中から感謝の心が湧き起こってまいります。

この時に、先ほど読んでいただいた聖書の感謝という言葉が書いてある、あの聖句の箇所を思い出したのです。いつも聖句を使わせていただく場合には根掘り葉掘り辞書を使って、聖句をかみくだいたり、あるいはいろいろな角度から見て、このお話ではおかしくないかどうかをいつも考えて聖句を選んだりしますが、今回はそういうことは全くいたしませんでした。

これは心の中にふっと浮かんできた聖句だったものですから、その聖句をそのまま皆さん方にお伝えした次第です。

もう1つ、感謝という言葉について、その折に思い出したことがあります。これは、これまで、私が感謝できないような、あるいは腹立たしいこと等があったときに、感謝ということが心のなかで押し殺されてしまうようなことがあったときに感謝を思い出させてくれるあることでした。

何だと思いませんか。突然ですが、ヨハネ・パウロ2世、第264代ローマ教皇のことはご存じですか。日本にいらしたはじめての教皇であることはご存じですか。何十年も前ですが、日本にいらしたことがあります。そのころ私が住んでいた長崎市にもいらっしゃいました。私どもは新興住宅地として開発されていた長崎市内の浦上というところに引っ越しをして居住しておりました。そこでは、何か今までとは違った感じの土地柄を感じたものでした。朝からアンジェラスの鐘が地域に響き、祈りに満たされて一日が始まっていくそのような地域でした。その地に、ローマ教皇が来られるというので、その日は、周り

が何かワーツというような雰囲気や地域で地域の思いが伝わってきて、私も「行かねば」という気持ちになり、今、野球場になっている場所ですが、そこにローマ教皇がいらして、いろいろなお話をして下さいました。何回も言われた言葉が「神に感謝(カーミニカンシャ)」と、日本語でおっしゃったのです。それをおっしゃって、おっしゃりながら去って行かれたことを覚えています。

「カーミニカンシャ」と、こういう抑揚でした。その言葉がずっと心の中にありました。さて話を戻しますが、今お話ししておりました私の手術の後も、この聖句を思いだして、「感謝」という言葉から、「カーミニカンシャ」というローマ法王の日本語のメッセージが思い出されておりました。

これは本当に不思議といえば不思議ですが、私の心の中で、感謝が押し殺されてしまうような時にいつも出てくる言葉。そして心の中を非常に平穏にしてくださる。確かポーランド出身のローマ教皇だったと思います。ローマ教皇の「カーミニカンシャ」という言葉が手術の後の状況のなかでずっと体の中に響いておりました。

人間というものは肉体的、精神的基盤として感謝の気持ちというものを持ちながら生きていくことができる、それがゆるされておられそれが恵みとして与えられている存在でないか。そのように思って久しいのですが、私は痛みとの闘いをしながら、本当に起き上がることも体を横にすることもできないままに日々を過ごし、しかし起き上がり、しかし歩き回り、ということができるようになって6日間で退院することができました。そして冬期休暇後、授業を普通通り行うことができるようになりました。

自然な自分の肉体的、精神的基盤の営みに立ち戻って生きていくことができれば、人はやはり普通に生きていくことができる。その状況を感謝し、さらに深い感謝をし、さらにそれを恵みとして感じ、神の力の中に抱かれて生きている自分自身を知る時を与えられました。そういう時をそこに与えられたのではないかと思うのです。体を20センチ切る、そして、内臓を切り取る、まあ思っただけでも大変な状況ですが、でもそれを乗り越えていくプロセスのなかで本当に大きな恵みを神様から与えられていることを実感できました。

主に対する感謝ということの中で、肉体的にも、精神的にも神に抱かれて存在している自分。自分が置かれた状況を思いながら感謝して生きる時に、そこに一つ一つ与えられている意味を見出していくことができました。そこには必ず意味がある。その意味はさらに大きな感謝をもたらしてくれるというこれまででした。

自分の存在は神様の大きな愛の中にゆるされてあることを実感する。そのときには気づかずとも、時はくる。そういう時になって、今考えてみると本当に大きな恵みの連続の時であったな、痛みではなくて、本当に大きな恵みの時であったという思いが非常に強く、あるいは深く広く、心の中に広がっていくこの今の時でございます。昨年の12月末から1月初めにかけての経験と私は、私の現在までの全てに通じることです。その思いを皆さんにお話しできたこと、これも本当に大きな感謝であります

2015年4月14日 聖学院大学 全学礼拝